

伝説の洋画家たち 二科100年展

2015年9月12日(土)―11月1日(日)



東郷青児 ピエロ 1926年 第15回展
東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館蔵



岸田劉生 静物(湯呑と茶碗と林檍三つ)
1917年 第4回展 大阪新美術館建設準備室蔵



小出楯重 帽子をかぶった自画像
1924年 第11回展 石橋財団ブリヂストン美術館蔵

「美術の春」、「芸術の秋到来」ということで、さまざまな美術団体に所属する作家たちは毎年、円熟した制作態度を表明し、またテーマや技法などに新たな試みを盛りこんで作品を発表します。いつのまにか「公募展は日本の文化。」(国画会)とまで称されるようになっていたのですが、職能集団である画壇や会派は、自我や個性を尊重する「近代」の芸術家のありかたとはすこし様相がちがって今では国際的にも際立つ存在であり、これは師弟関係や技術の伝承を大切にしている日本人の芸術的伝統や心性とどこかで通底しているものがあるのかもしれない。

ともあれ、芸術は既成の価値観と鋭く対立しながら「発展」するものとしたら、ちょうど100年前、審査方法や運営をめぐり、当時官展とみなされていた文部省美術展覧会(略称『文展』)と袂を分かち、在野の公募展として二科会は誕生しました。以来、会派としての自由で開放的な姿勢は今日まで一貫して変わらず、芸術家たちも、ある者は欧州で学んだ最新の芸術思潮を紹介し、さらにある者は日本的絵画の拠り所となるべく野心的な作品をつぎつぎと発表してきました。

たとえば小出楯重は、『帽子をかぶった自画像』(1924年・石橋財団ブリヂストン美術館蔵)でイーゼルを立て鏡に映る自画像を描きこもうとしています。西歐風のアトリエのように見えても、じつは大阪市内中心部・島之内の純然たる日本家屋の二階和室に絨毯を敷き詰めただけの空間。日本人が西歐起源の油彩表現を我が物にする困難さをよく知っていた楯重は、「骨人画家」と自称したほどの病身瘦軀であったにも関わらず、和服を捨て洋服をまとい、椅子とベッドの生活、パンとバターを食するなど衣食住全般にわたり西洋的生活を晩年まで貫きとおしました。命と引き換えにするほど新しい芸術的価値の創造に努める楯重の真摯な姿勢は、古賀春江、岸田劉生、関根正二や村山槐多、佐伯祐三など、この展覧会で紹介される数多くの画家たちとも共通しています。

二科会100年の歴史、日本人が洋画や彫刻を自家薬籠中のものするために努力してきたもうひとつの日本近代美術史を、『伝説の洋画家たち 二科100年展』を通してお楽しみください。

(篠 雅廣)